

観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書

平成11年度国庫補助事業報告書

丸山古墳Ⅱ

2000. 3

観音寺市教育委員会



丸山古墳の石室(北・東壁)の状況



丸山古墳の石室と石棺(平成10年度撮影)

例 言

1. 本書は、観音寺市教育委員会が平成11年度国庫補助事業として実施した、観音寺市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
2. 今回の発掘調査は、香川県観音寺市室本町字西丸山691番に所在する丸山古墳を対象とした。
3. 発掘調査及び本書の執筆・編集は、観音寺市教育委員会事務局生涯学習課 文化振興係 主査 久保田昇三が担当した。また、出土遺物の整理、実測の一部は片桐節子が担当した。
4. 挿図の一部に観音寺市全図其の1(1/10,000)を使用した。図面の方位はすべて、磁針方位で示した。また、実測図等の縮尺はすべてスケールで表示した。
5. 出土遺物は観音寺市郷土資料館で保管している。
図面・写真等は観音寺市教育委員会事務局で保管している。
6. 本事業の実施にあたっては、室本新田自治会、宗教法人丸山神社代表役員西田準一氏、市文化財保護審議会長請川昇氏、発掘調査に携わった坂田昇氏、西山秋久氏、松本光男氏、牧野巧氏をはじめ、ご協力を頂いた方々に記して謝意を表します。
7. 本事業及び本書の作成にあたっては、次の方々よりご指導ご協力をいただいた。記して謝意を表します。(アイウエオ順・敬称略)
青柳泰介、石野博信、梅木謙一、遠藤亮、大久保徹也、片桐孝浩、亀田修一、川畑聰、木下晴一、蔵富士寛、蔵本晋司、笹川龍一、塩崎誠司、高木恭二、新納泉、丹羽佑一、橋本達也、藤井雄三、松本和彦、松本敏三、森格也、森下英治、柳沢一男、山下隆次、山元敏裕、吉田広、渡部明夫

目 次

グラビア・例言・目次

	頁
1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 立地と環境	1
周辺遺跡地図 (1/20,000)	2
3. 調査概要	3
丸山古墳周辺地形測量図・トレンチ配置図	8
丸山古墳石室実測図(1)	9
丸山古墳石室実測図(2)	10
土層図・トレンチ実測図(1)	11
1. 石室東側壁周辺土層図 (トレンチ 12)	
2. トレンチ 8	
土層図・トレンチ実測図(2)	12
3. トレンチ 3	
4. トレンチ 10	
5. トレンチ 11	
土層図・トレンチ実測図(3)	13
6. トレンチ 7	
7. トレンチ 9	
出土遺物実測図(1)	14
出土遺物実測図(2)	15
出土遺物実測図(3)	16
4. まとめ	6
5. 写真	17
1. トレンチ 3	2. トレンチ 7
3. トレンチ 8 (玉垣より内側)	4. トレンチ 8 (玉垣より外側)
5. トレンチ 8 (玉垣より外側)	6. トレンチ 9
7. トレンチ 10	8. トレンチ 11
9. トレンチ 11	10. トレンチ 11
11. トレンチ 12	12. トレンチ 12
13. 石室東側壁の状況 (石室床面と側壁の状況)	14. 石室北壁と控積みの状況
15. 石室 北・東側壁の状況	16. 出土遺物 (馬形埴輪の一部-実測図No. 1)
17. 出土遺物 (馬形埴輪の一部-実測図No. 12)	18. 出土遺物 (馬形埴輪の一部-実測図No. 2)
19. 出土遺物 (馬形埴輪の一部-実測図No. 3)	20. 出土遺物 (動物埴輪の脚部-実測図No. 5)
21. 出土遺物 (動物埴輪の脚部-実測図No. 4)	22. 出土遺物 (キヌガサ形埴輪-実測図No. 6)
23. 出土遺物 (円筒埴輪-実測図No. 7) ヘラ記号	24. 出土遺物 (円筒埴輪-実測図No. 10)
25. 出土遺物 (円筒埴輪-実測図No. 11)	26. 出土遺物 (鉄剣・鉄刀-実測図No. 30、31)

1. 調査に至る経緯と経過

丸山古墳は、七宝山の稲積山から南に延びる尾根の少し高まった郷亀山と呼ばれる山頂部にあり、現在は丸山神社の境内にある。この地にはかつて皇太子神社が所在していたが室本浦に移され（慶長13-1608）、明治36（1903）年に巖島神社ができるまでなにも無かったようである。明治38（1905）年には山祇神社が遷座された。恐らく、この前後に墳丘が半分削られ、石室が発見されたのではないかと思われる。大正5（1916）年には山祇神社が丸山神社と改称され、大正14（1925）年に巖島・丸山神社が合祀され現在の丸山神社となっている。

昭和22（1947）年10月、旧三豊中学校（現在の香川県立観音寺第一高等学校）の教諭と生徒によって発掘調査が行われている。その当時の状況が史跡名勝天然記念物調査委員の和田正夫氏により報告されているので以下に簡単にその内容をまとめてみる。

- ・二つの竪穴式石室が確認されている。

第1号石室（石棺有）

石室幅 1.3～1.4 m 石室高 1.15 m 石室長 2.0 m以上 石棺長 1.92 m 石棺幅 1.05 m

出土品 鉄刀2（石棺内） 鉄刀破片（石室内南東隅）

第2号石室（石棺無）（第1号石室に平行して東側約5 mのところ）

石室幅 1.4 m 石室高 1.6 m 石室長 不明

出土品 鉄刀、鉄鏃など（詳細不明）

- ・その他の出土品

短甲破片？、円筒埴輪、朝顔形埴輪、キヌガサ形埴輪、家形埴輪など

- ・石棺について

南端から2/3程度のところで蓋に亀裂があり調査時に折れている。

蓋を取り外し内部の調査を行ったが、鉄刀以外の副葬品は確認できなかった。

以上のような状況であるが、現在に至るまでその具体的な資料が残されておらず、また、露出している石棺を観察すると蓋が身の内側にずれ落ちた状況もあり、今後の遺跡の保存が危惧される状態であった。そこで、平成10年度～平成11年度の二カ年にわたり遺跡の保存と活用を図るための詳細な資料を得ることを目的として発掘調査を実施するに至った。

なお、当古墳は市内はもちろん三豊郡においても数少ない古墳時代中期の古墳であり、当地域の古墳文化を考察する上で貴重な文化財である。特に、刳抜式の舟形石棺は阿蘇溶結凝灰岩製であることがすでに確認されている。

2. 立地と環境

当古墳は、香川県西部の観音寺市内の室本町に所在し、海を間近にひかえ直線距離で約550 mで瀬戸内海の有明浜に出る。墳頂部からは、北は紫雲山遺跡のある庄内半島から西は愛媛県の東予地方の燧灘の沿岸や瀬戸内の島々はもちろんのこと天候に恵まれれば中国地方まで望むことができる。周辺の遺跡には、なつめの木の貝塚（縄文前期・後期）、室本遺跡（弥生前期）、鹿隈鎌子塚古墳（前期）、前の原箱式石棺墓、池の宮古墳（後期）、興昌寺山1号古墳（後期）がある。また、古墳時代以降の遺跡には、高屋廃寺、条里制跡、九十九山城などがあり、最も近くの七宝山（444 m）の稲積山には延喜式内社の高屋神社が所在している。また、市内の原町には古墳時代中期の青塚古墳がある。当古墳は帆立貝式の前方後円墳といわれ丸山古墳と同様に阿蘇溶結凝灰岩製の石棺の一部（縄掛突起と短辺部の一部分のみ）が出土している。なお、阿蘇溶結凝灰岩製の石棺は現在のところ四国では4例（丸山古墳・青塚古墳・高松市長崎鼻古墳・愛媛県蓮華寺在一いずれも刳抜式の舟形石棺か？）確認されている。

讃岐の石棺といえば国分寺町の鷲の山や津田町の火山の石材で割竹形石棺が製作され、県内はもちろんのこと県外にも搬出されている事例があるが、それとは時期も分布範囲も一線を画しているのが阿蘇溶結凝灰岩製の石棺である。

周辺遺跡地図 (1 : 20,000)



- | | | |
|-------------|------------|-------------|
| 1. 丸山古墳 | 2. 池の宮古墳 | 3. 室本遺跡 |
| 4. なつめの木の貝塚 | 5. 鹿隈鐘子塚古墳 | 6. 興昌寺山1号古墳 |
| 7. 九十九山城 | | |

3. 調査概要

本年度の調査は、昨年度（平成10年度）の結果に基づき、さらに遺跡の性格を把握するため、最初に、遺跡周辺の地形測量範囲を丸山神社の玉垣の外側部分の石垣のあたりまで範囲を広め実施した。また、新たに遺跡の範囲の確認のためにトレンチ（以下、トレンチはTで標記する。8頁のトレンチ配置図についても同様。例：トレンチ1→T1）を7カ所設定し遺構の検出を行った。さらに、埋葬施設については、昨年、石棺の残存状況と石室の一部の確認を行った石室（これまで第1号石室とされていた。）の全体的な規模・形態等の確認とこれまで第2号石室といわれていた石室の有無の確認を行った。以下が、その概要である。

◎遺跡の周辺地形について

丸山古墳は以前からその墳丘は半分程度削りとられていて、石室と石棺が一部露出した状態であった。見かけ上の残存している墳丘の周囲には幅2～3m程度の平らな通路が巡っており、その周囲には玉垣が設けられている。玉垣の外側には後世のものであろう石垣が主に遺跡の東と西側に築かれている。石垣の外側については自然な山のなだらかな斜面となっている。恐らく、明治時代に神社が遷座され、その後、社殿建築用の平坦な境内地をある程度確保するため、墳丘が削られる途中で石室・石棺が発見されたため現在の神社の建物等の配置と現在の地形になったものと考えられる。墳丘を削った土は平坦な場所を確保するため周囲に広げられたもので、石垣は土砂流出を防ぐためのものであろうと推測される。また、境内には石垣と同様水溜などもあり、それらは古墳の葺石や石室の石材を利用したと思われるものも見受けられる。現在残っている墳丘の周囲に目を向けると、過去に、地元古老の言によれば、よい土が採れるというので土を採取していた人がいたらしく、墳丘の東・西側には特に激しく墳丘が削り取られている状況がある。

◎トレンチについて

T3

・平成10年度に調査したトレンチを約1m玉垣付近まで延長した。葺石は地山（花崗土）の上に葺かれており、トレンチ中央部で地山層が平坦になるところで葺石も無くなっている。恐らく、この地山層の傾斜の変換するところまでが（他のトレンチでも同様であるが）墳丘でないかと思われる。

T7

・トレンチの墳丘側約1mまでは墳丘が削られている。これは、周囲に通路を作るため比較的新しい時代に削平されたと聞いている。平面的に見てもトレンチ1からトレンチ7にかけて少しずつ削り幅が増えているのが推測される。よって、墳丘の残っている場所はその場所から約1.5mの所までと考えられ、それより外側約2.5mは緩やかな傾斜の部分があり、それより外側についてはさらに傾斜が変わっており自然地形であると思われる。また、緩やかな傾斜の部分が終わるあたりには墳丘を削った土を周囲に広げた土砂流出防止のためと思われる石垣が確認される。葺石はあまり残存していないが、地山層の傾斜が変わる状況がよくわかる。

T8

・このトレンチは埋葬施設とほぼ直交するように設定した。玉垣をはさんでのトレンチであるが、玉垣の外側については、多くの葺石が確認された。地山層の上に葺かれた葺石は玉垣より外側約1.5mの地点まで確認され、ちょうどその辺りで地山層の傾斜の変換点があり、それより外側は平坦に近いゆるやかな傾斜となっている。また、古墳の遺構とは直接関係ないが、この場所には特に墳丘を削ってその土砂を周囲に広げて土止めの石垣を築いている状況がよくわかる。石垣の高さは約1.1mあり、南北方向に延びている。

T 9

・遺跡の範囲を知るために、神社建物、墳丘の南側に3カ所のトレンチを設定した。T 9、T 10、T 11がそれである。T 9については、微妙に墳裾（地山層の傾斜の変換点）が内側にあるのか、その状況は確認できなかった。しかし、墳丘から外側の部分の地山層の状況や墳丘を削った土砂の堆積状況や土止めの石垣のなどが確認された。

T 10

・墳丘内側からトレンチ中央部辺りまでは地山層が表土下に見られこの部分までは墳丘が削平されていると思われる。中央部から外側にかけては地山層が緩やかに傾斜しており、トレンチの端のあたりで平坦な傾斜になる。トレンチの西側の壁に見られる葺石とみられる石のならばは地山層から離れており転落または後世の移動のものと考えられる。

T 11

・神社拝殿の基礎コンクリートに接して、北側のトレンチ1に対応するように設定した。表土から約80cmのところ葺石の並びを確認した。トレンチの石室側の壁から約80cmのあたりまでの範囲である。一部葺石を取り除くと地山層は石室方向に向かいながら緩やかな傾斜をもって上昇しはじめているのが確認できた。また、地山層は葺石の終わるところから約2.5mの間ほぼ平坦なレベルが続き、さらに外側に向けてはレベルが上昇する幅のある溝状の遺構が確認された。また、本トレンチに限られているのであるが、葺石の間や地山層の平坦な部分からは形象埴輪（動物埴輪）が出土していることから考えると、今後、トレンチの外側に更なる遺構の存在の有無の確認が必要である。

T 12

・本トレンチは、埋葬施設と墳丘、石室の構築方法等の確認のため現在残されている墳丘の東側に墳丘が削られている南側の面に沿って設定した。まず、昭和22年の記録によれば、二つの竪穴式石室（石棺の埋納されている方が第1号石室、第1号石室に平行して東側約5mの所に第2号石室）があったとされているが、その両石室の関係等の確認を行った。結果、第2号石室の存在は確認できず、むしろ（後段の埋葬施設の項で述べるが）これまで第1号石室といわれていた石室のみであることが判明した。発掘調査以前から墳丘の半分が削られた切り取り面には石室の側壁と思われる石積みを確認されていたが、これを昭和22年当時は第2号石室の側壁と考えたのだろうが、この石積みが第1号石室の東側の側壁であったということは、竪穴式石室の一般的なイメージから考えると誤認しても仕方ないことのように思われる。

検出した土層の状況から地山層は標高47m程度までであり、そこから上層の墳丘は盛土を行っている。また、昨年、石室の西側壁の基底部周辺の土層でも確認したが、石室の構築前段階で黒褐色の固いベースの層を設けていることが確認できる。この土台となる層を築いた後、側壁の基底石を配し、扁平な石材を積み上げ周到な控え積みを伴いながら石室を構築した状況が窺われる。なお、石室内部の床面については、まず、基底石を置く前に花崗土を盛り、つき固めた高さ約38cm前後の台上のステージを構築し、その後、白色粘土層を約4cm程度敷き詰めさらに精選された径約1～5cmの円礫を白色粘土に混入させ敷き詰め床面を形成している。このような状況は、昨年確認した西側壁基底部周辺のものと同様である。

◎出土遺物について

トレンチ11を除く各トレンチならびに石室の埋土からはそのほとんどが円筒埴輪の破片の出土であり、その量は多くない。また、トレンチ11においてもその出土量としては多いとは言えないが、その中でも、形象埴輪（動物埴輪）が出土したことは注目すべき点である。当古墳でも、これまでキヌガサ形埴輪、家形埴輪などの出土は伝えられているが動物埴輪が出土したことは、香川県内においてもその出土例は少なく貴重な資料が得られた。以下に、そのおもなものを紹介する。

○馬形埴輪1（実測図No.1写真No.16）

・馬の頸から胴体にかけての側面部分のものと思われる。額革と頬革と顎革とうなじ革の交差する辻金具の役割を果たす留め金具の表現がある。また、手綱とも考えられる突帯もみられる。

○馬形埴輪 2（実測図No. 2 写真No. 18）

・馬具の一つで、胴体側面下半部に付けられる障泥の一部と考えられる。破片を側面から観察すると、内側は丸く胴体の部分として造られ、障泥の部分は平坦に成形されており、文様などはない。

○馬形埴輪 3（実測図No. 3 写真No. 19）

・馬の蹄の部分表現していると思われる。馬形埴輪 2 に接して出土した。

○動物埴輪 1（実測図No. 5 写真No. 20）

・動物の脚部であるが、蹄の表現により偶蹄目の動物と考えられる。鹿、猪、牛のどれかではないか。

○動物埴輪 2（実測図No. 4 写真No. 21）

・動物の脚部であるが、動物名の特定は困難である。全体的に受ける印象ではトリを表現しているのではないと思われるが、前面にある四つの尖った指あるいは爪状のものの表現には矛盾がある。

○キヌガサ形埴輪 1（実測図No. 6 写真No. 22）

・過去に出土例があるものと文様の表現などから同一個体のものではないか。裏面には円筒部の一部と思われるものが残存している。

○ヘラ記号のある円筒埴輪？（実測図No. 7 写真No. 23）

・破片であるのでその一部は失われているが、円を縦に二分割するようにヘラ書きしたもの。

○鉄剣・鉄刀（平成 10 年度調査時に出土。実測図No. 30、31 写真No. 26）

・昨年度の調査で石室内（石棺と石室北側壁の間の床面より）より出土したものであるが、鉄剣（一部欠損）は全長約 78 cm、幅約 4 cm で石室北壁から約 10 cm のところに北壁にほぼ並行して出土したものである。鉄刀は全長約 81 cm、幅約 3 cm で石室北壁から約 40 cm のところに鉄剣よりは東よりに北壁にほぼ平行して出土したものである。調査終了後、X線撮影を行ったが象嵌等の装飾は発見できなかった。また、昨年概報では鉄剣を鉄刀としていたが、X線撮影の結果間違いが判明したので訂正する。

また、円筒埴輪については、外面 2 次調整に B 種ヨコハケのものがみられ、内面調整は指押さえ、ハケ、ナデ（指ナデ、板ナデ）などがある。タガは台形状のものが一部みられるほかは概ね突出度の高いものはみられない。ただ、部分的にタガが剥離したもののなかには、タガを貼りつける前段階でタガの位置をあらかじめ決めたとと思われる痕跡（ヘラ痕）が観察できるもの（実測図No. 10、11）がある。スカシについては円形のもの（実測図No. 8、9）が 2 点であるが確認される。また、黒斑のあるものはみられないことから、川西編年Ⅳ期（5 世紀中葉～後半）に相当するものと推定される。

◎埋葬施設について

トレンチ 12 の項で少し触れたが、丸山古墳の埋葬施設は昭和 22 年の記録によれば、竪穴式石室が 2 基平行して存在するとされていた。しかし、トレンチ 12 の状況や石室北側・東側の壁の検出を行ったところ、第 2 号石室の存在は確認されず、これまで第 1 号石室とされてきた石室の規模が南北現存長約 4 m、東西長約 3.5 m を越える巨大な石室であることが判明した。本年度、確認した石室の東側は、石室内にかなりの数の比較的大きな石材が落下していることや、遺跡の保存上の心配等の諸事情もあり床面までの検出は行っておらず、石室の北側の壁および東側の壁を確認し、石室平面プランが確認できる段階でとどめた。石室内の詳細な状況を把握するには遺跡の重要性を考慮し、慎重かつ十分な準備が必要であると判断したためである。

さて、石室の周壁に目を転じると、扁平な石材（割石、板石等）を小口積みし持ち送りをしながら周壁を構築している。東・西壁については床面から 1 m 程度までは緩やかに内傾斜する構造をとり、北壁は床面に近い段階から、東・西壁のものに比してその度合いが大きいようである。このような状況から、周壁の上部および天井部は現在失われているが（前述の 1 m 程度の高さから周壁を強く持ち送りを行う

手法が想定されるが) 少なくとも 2.5 m を越える石室高であったと推定される。

前述のような石室の正方形に近い長方形かつ大型の平面プランと持ち送りの構造を持つ周壁で石室高が 2.5 m を越えるものであると推測される石室の状況から、これまで竪穴式石室であると考えられていた当古墳の石室の持つ意味を再検討せねばならなくなった。いわゆる竪穴式石室のイメージは狭長な石室プランで割石や扁平な石材を小口積みにして周壁を構築し蓋石を置くというものであるが、丸山古墳の石室はそのようなものとは大きく異なった形態をとっている。また、石棺の配置状況により複数埋葬を行っている可能性があり、石室の南側の部分が失われていることにより確認の方法が困難ではあるが、横穴式の石室である可能性が高いものと思われる。横穴式石室と仮定した場合、丸山古墳周辺の神社境内には天井石や袖石、マグサ石となりうる石材が散見されることも見逃せない。

宮崎大学の柳沢一男氏の所見では、5 世紀中葉ごろという年代であれば、九州における初期横穴式石室の時期に合致する。石室構造からみれば肥後系に近いが、肥後系の特徴である石障を持っていない。朝鮮半島から直接渡来した造墓集団の所産である可能性も否定できないし、また、中九州付近の特定地域を経て石棺とともに石室構築の工人が導入されたものとも考えられる。しかし、九州で舟形石棺と肥後系の横穴式石室が共存する事例はなく、丸山古墳は九州のいずれの地域においてもみられないセット関係をもつ。したがって、石棺・石室構築・墳丘構築など造墓に関わる諸要素が個々別々に取り入れられている可能性も考える必要がある。とのことであり、従来から阿蘇溶結凝灰岩の舟形石棺をもつことで九州との関係がいわれていたが、さらに肥後系に近い石室形態が確認されたことにより、より一層、九州地方との密接な関係が想定されるとともに、石室幅では 5 世紀代においては全国最大級の石室規模であることから丸山古墳の被葬者像について、今後、論議を重ね再評価をする必要がある。

4. まとめ

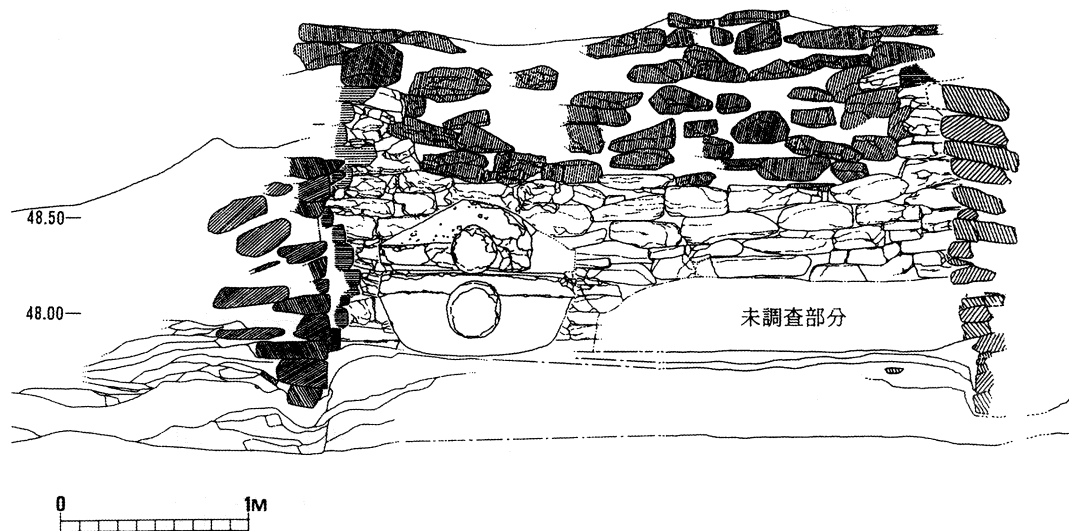
最後に、平成 10 年、平成 11 年度の調査結果を以下に整理した。

- ①墳丘規模が推定直径約 35 m の円墳であり、墳丘には葺石が葺かれている。
- ②埋葬施設である石室は、南北現存長約 4 m × 東西長約 3.5 m を越える方形に近い長方形プランの大型の石室で、周壁は割石・板石を小口積みし持ち送りを行い周到な控え積みを伴いながら構築されている。推定される石室高は少なくとも 2.5 m を越えるものであることや埋納されている石棺の位置により複数埋葬が考えられることにより、横穴式の石室である可能性が高いこと。さらに、石室プランや想定される周壁や天井部の形態から肥後系に近い構造の石室であることにより九州との密接な関係が窺えること。
- ③出土品には、石室内から鉄剣 1 ・鉄刀 1 ・その他鉄器片、石室埋土内や周囲のトレンチから円筒埴輪やキヌガサ形埴輪、動物埴輪などが出土した。特に、トレンチ 11 からは馬形埴輪の一部と考えられるものや動物名は不明であるが二種類の動物埴輪の脚部などが出土した。
- ④これまでのところ須恵器の出土例はない。円筒埴輪等の出土品によれば、古墳の築造年代は川西編年 IV 期（5 世紀中葉～後半）のものとして推定される。

【参考・引用文献】

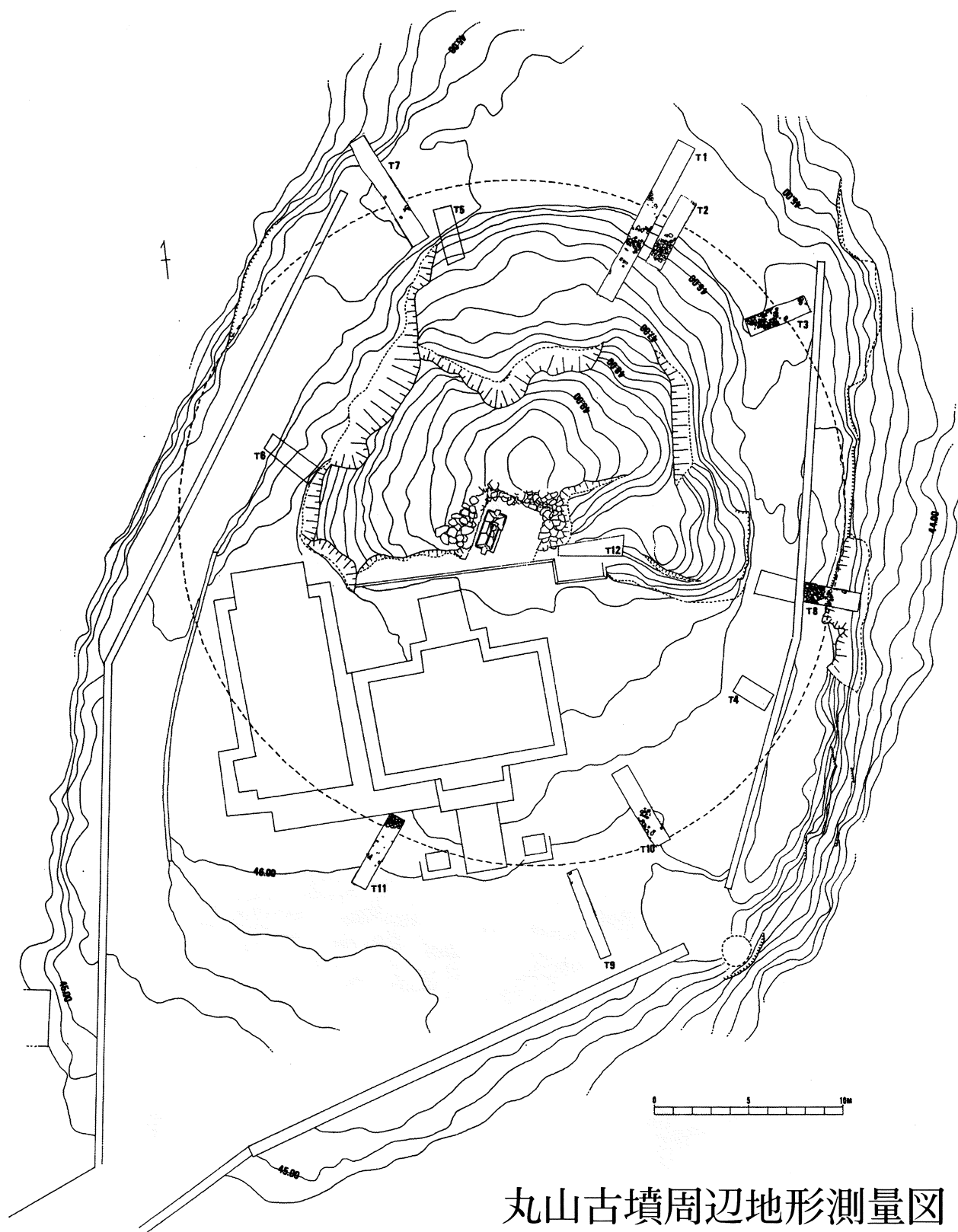
- ・間壁忠彦、間壁茂子、山本雅靖、藤田憲司「石棺研究ノート(4)」『倉敷考古館研究集報 第12号』1976.8.31 (財)倉敷考古館
- ・間壁忠彦『石棺から古墳時代を考える』1994.1.25 (株)同朋舎出版
- ・大塚初重、白石太郎、西谷正、町田章編『考古学による日本歴史9 交通と交易』1997.2.20 有山閣出版(株)
- ・大塚初重編『図説 西日本古墳総覧』1991.5.10 (株)新人物往来社
- ・森貞次郎『九州の古代文化』1983.9.30 (株)六興出版
- ・柳沢一男「肥後型横穴式石室考―初期横穴式石室の系譜―」『鏡山猛先生古希記念 古文化論攷』S55.10.20 鏡山猛先生古希記念論文集刊行会
- ・柳沢一男「堅穴系横口式石室再考―初期横穴式石室の系譜―」『森貞次郎博士古希記念 古文化論集 下巻』1982.4.24 森貞次郎博士古希記念論文集刊行会
- ・『第2回九州前方後円墳研究会資料集 九州における横穴式石室の導入と展開 (第I分冊)』1999.5.15九州前方後円墳研究会
- ・『第2回九州前方後円墳研究会資料集 九州における横穴式石室の導入と展開 (第II分冊)』1999.5.15九州前方後円墳研究会
- ・高木恭二「九州の刳拔式石棺について」『古代文化 第46巻第5号』H6.5
- ・高木恭二「阿蘇石の利用―宇土半島の事例―」『史叢 創刊号』1997.8 熊本歴史学研究会
- ・高木恭二「石棺を運ぶ」『東アジアの古代文化 第50号』1987.1.20
- ・森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜―畿内型と九州型」『古代学研究 111』1986.8 古代学研究会
- ・『熊本県文化財調査報告 第68集 熊本県装飾古墳総合調査報告書』S59.3.31 熊本県教育委員会
- ・斉藤香織「馬形埴輪における製作技法の変遷と地域性」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室 10周年記念論集―』1999.4 大阪大学考古学研究室
- ・松本敏三、岩橋孝、斉藤賢一「香川県埴輪出土遺跡調査報告」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要 第3号』S61.3.31 瀬戸内海歴史民俗資料館
- ・廣瀬常雄『日本の古代遺跡8 香川』S58.3.1 (株)保育社
- ・正岡陸夫、十亀幸雄『日本の古代遺跡22 愛媛』S60.7.31 (株)保育社
- ・『香川県史 第13巻 資料編 考古』S62.3.31 香川県
- ・『新編 香川叢書 考古編』S58.3.31 新編香川叢書刊行企画委員会
- ・『香川考古 第3号』1994.12 香川考古刊行会
- ・『観音寺市 通史編』S60.1.1 観音寺市
- ・『観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書 平成10年度国庫補助事業報告書 丸山古墳』1999.3.31 観音寺市教育委員会

【参考】



丸山古墳の石室イメージ図

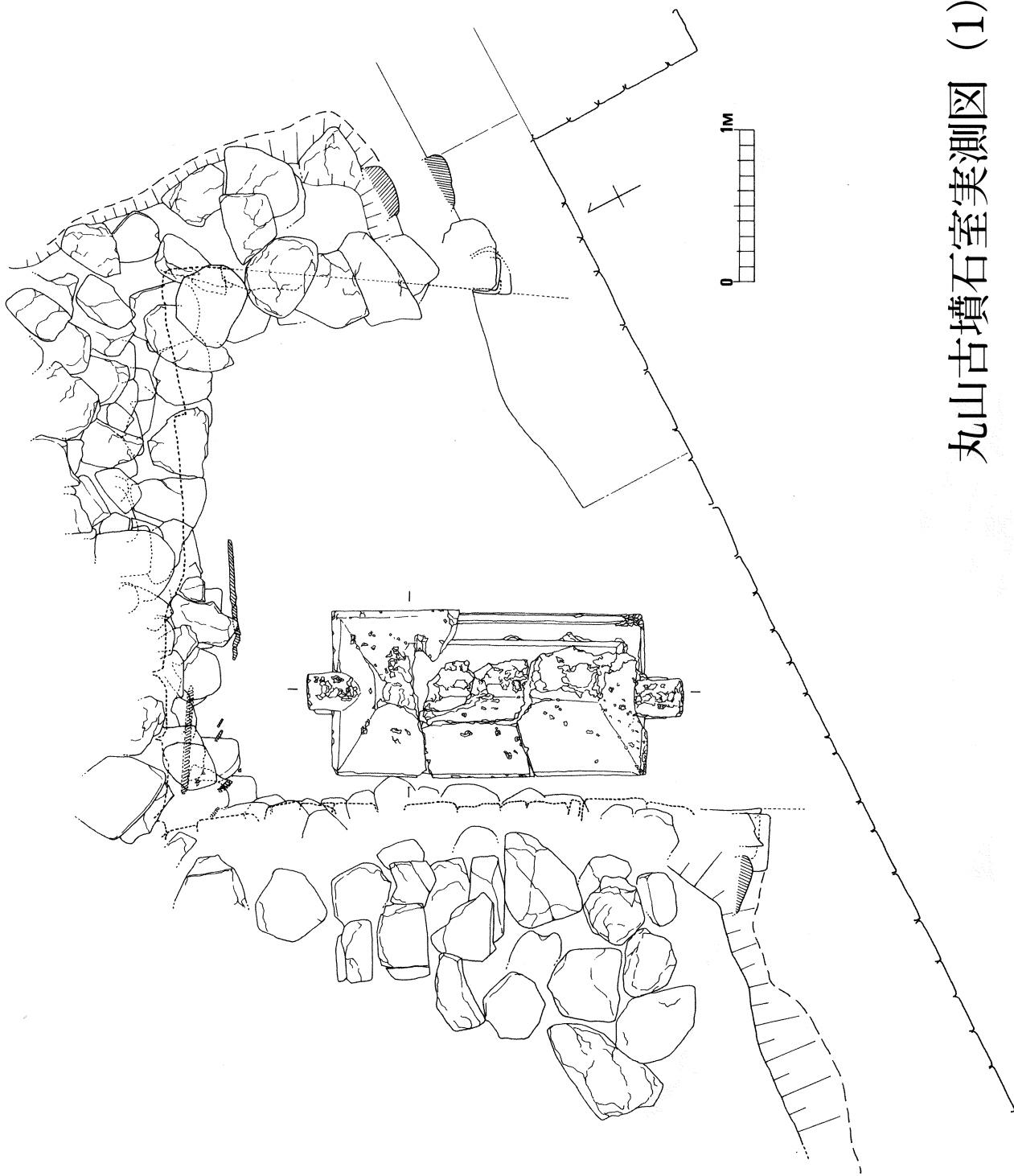
※南側からの見通し想定図であるので誤差を考慮して頂きたい。

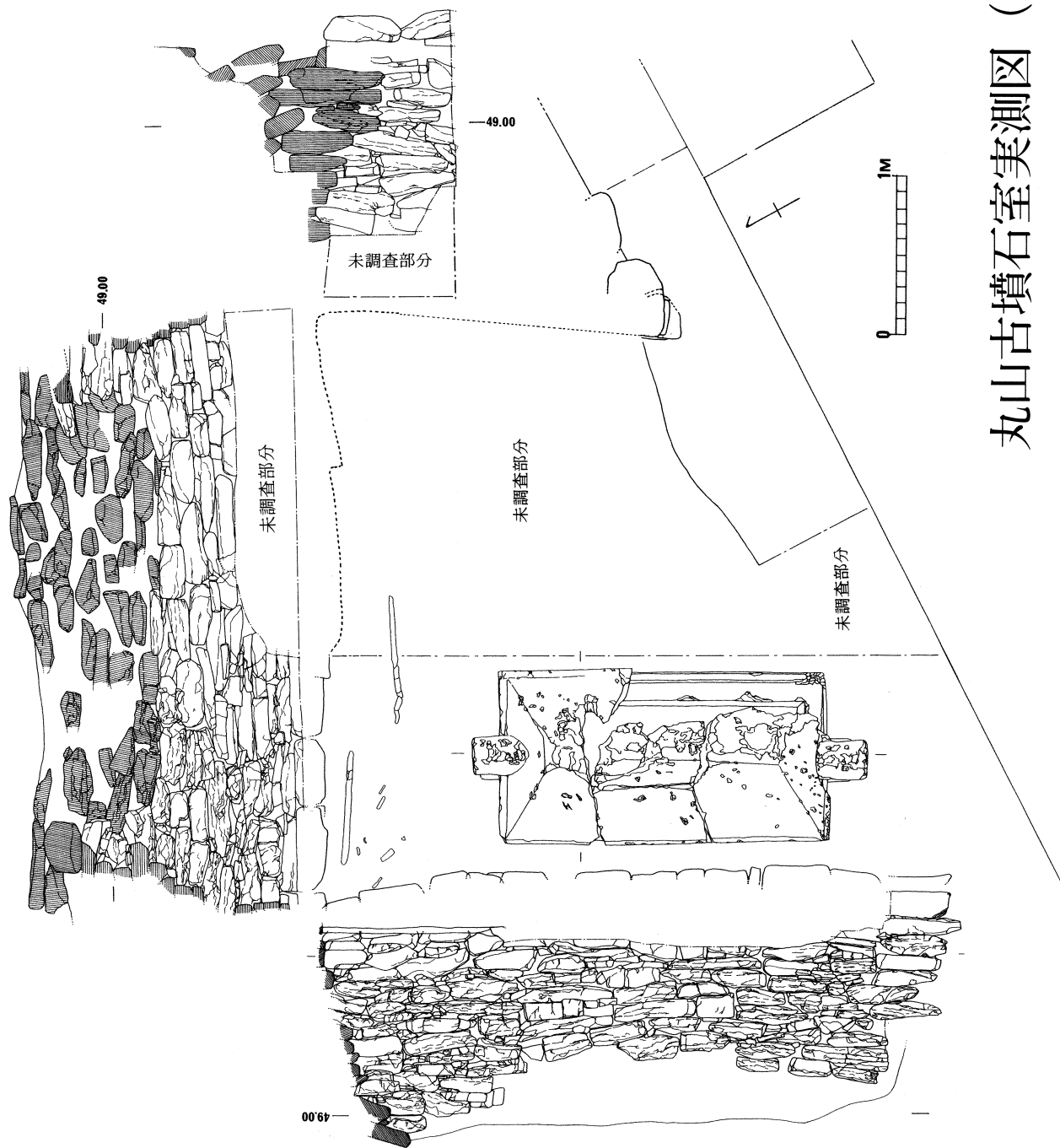


丸山古墳周辺地形測量図 トレンチ配置図

※古墳の推定範囲を ----- で示した。

丸山古墳石室実測図 (1)

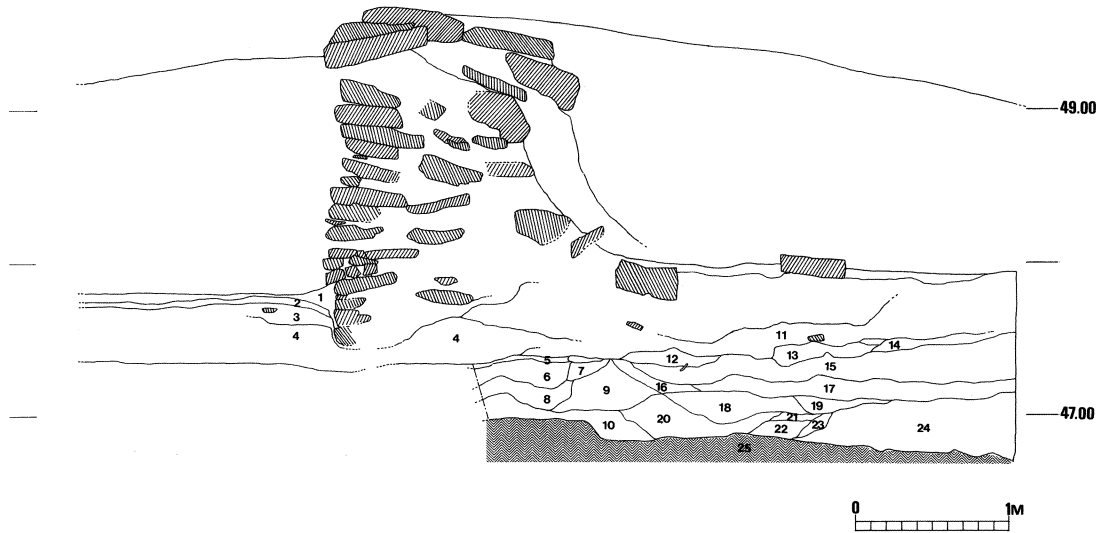




丸山古墳石室実測図 (2)

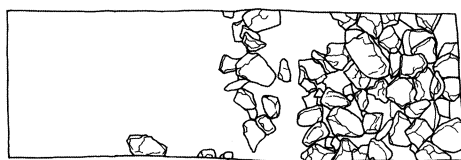
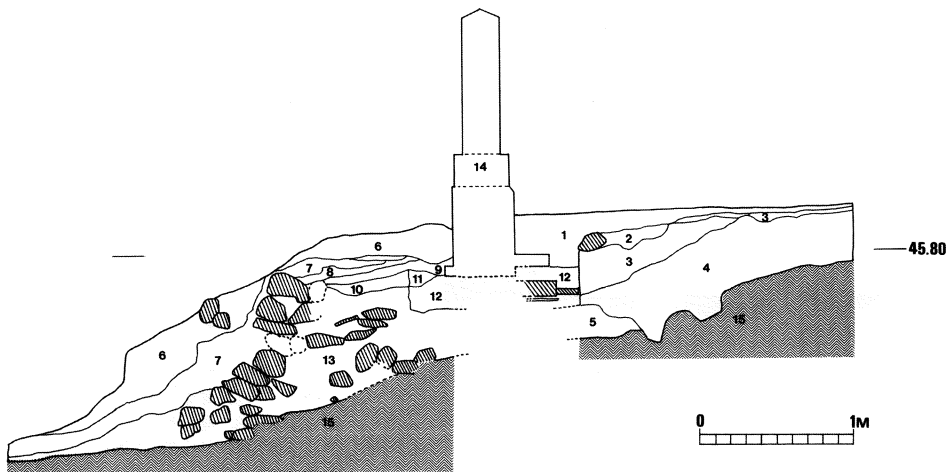
土層図・トレンチ実測図 (1)

1. 石室東側壁周辺土層図 (トレンチ 12)



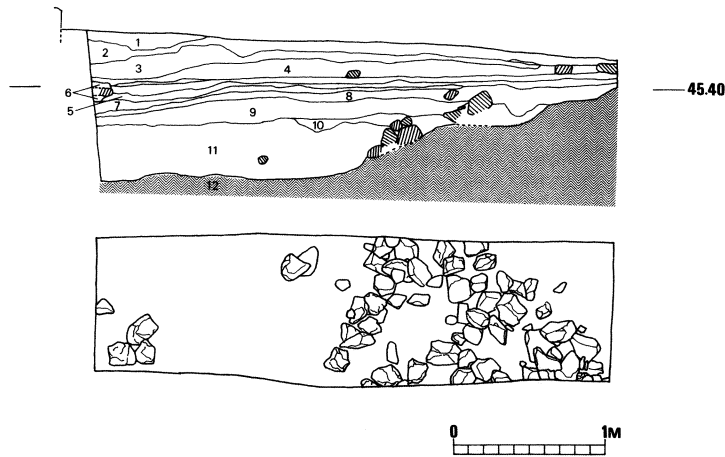
- | | | | | |
|----------------|-------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. 円礫層(白色粘土混入) | 6. 灰褐色粘質土 | 11. 黄茶褐色粘質土 | 16. 暗灰茶褐色粘質土 | 21. 灰茶褐色粘質土 |
| 2. 白色粘土 | 7. 黄茶褐色粘質土 | 12. 暗茶褐色粘質土 | 17. 暗黄茶褐色砂質土 | 22. 黄茶褐色砂質土 |
| 3. 明黄茶褐色粘質土 | 8. 黄灰茶褐色粘質土 | 13. 明黄茶褐色粘質土 | 18. 暗茶褐色粘質土 | 23. 黄茶褐色粘質土 |
| 4. 暗黄茶褐色粘質土 | 9. 黄茶褐色砂質土 | 14. 灰茶褐色砂質土 | 19. 黒灰褐色粘質土 | 24. 暗黄茶褐色粘質土 |
| 5. 黒褐色粘質土 | 10. 黄茶褐色粘質土 | 15. 黄茶褐色砂質土 | 20. 暗茶褐色粘質土 | 25. 地山層(花崗土) |

2. トレンチ 8



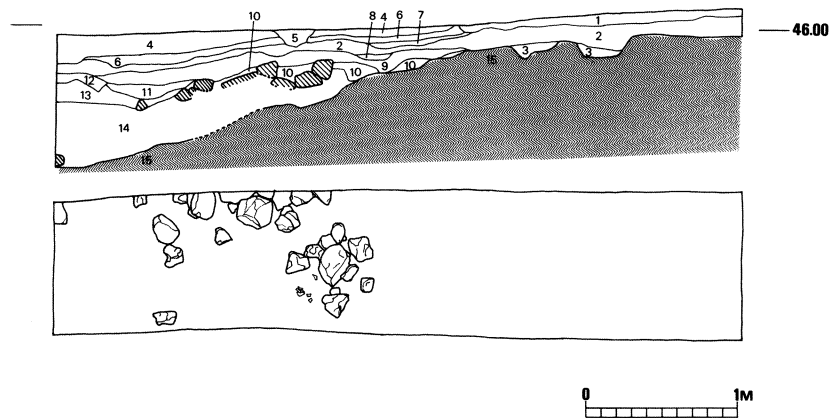
- | | | |
|-------------|------------|--------------|
| 1. 攪乱層 | 6. 黄茶褐色粘質土 | 11. 暗黄褐色粘質土 |
| 2. 黒褐色粘質土層 | 7. 腐蝕土 | 12. 栗石 |
| 3. 黄褐色粘質土 | 8. 黄灰褐色粘質土 | 13. 黄茶褐色粘質土 |
| 4. 暗黄茶褐色粘質土 | 9. 黄褐色粘質土 | 14. 玉垣 |
| 5. 暗黄褐色粘質土 | 10. 茶褐色粘質土 | 15. 地山層(花崗土) |

土層図・トレンチ実測図 (2)



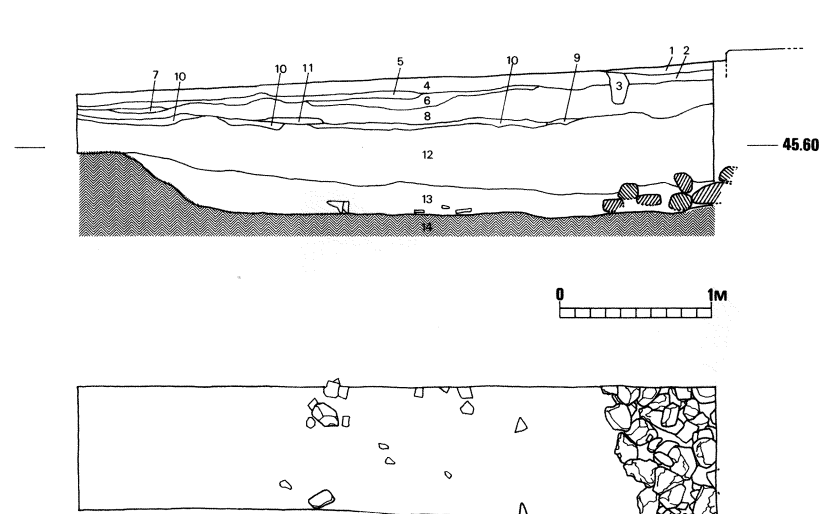
3. トレンチ 3

1. 暗茶褐色粘質土
2. 暗黄茶褐色粘質土
3. 茶褐色粘質土
4. 暗黄灰褐色粘質土
5. 腐蝕土
6. 栗石
7. 黄灰褐色粘質土
8. 灰褐色粘質土
9. 黄茶褐色粘質土(砂質混)
10. 明黄茶褐色粘質土
11. 暗黄茶褐色粘質土
12. 地山層(花崗土)



4. トレンチ 10

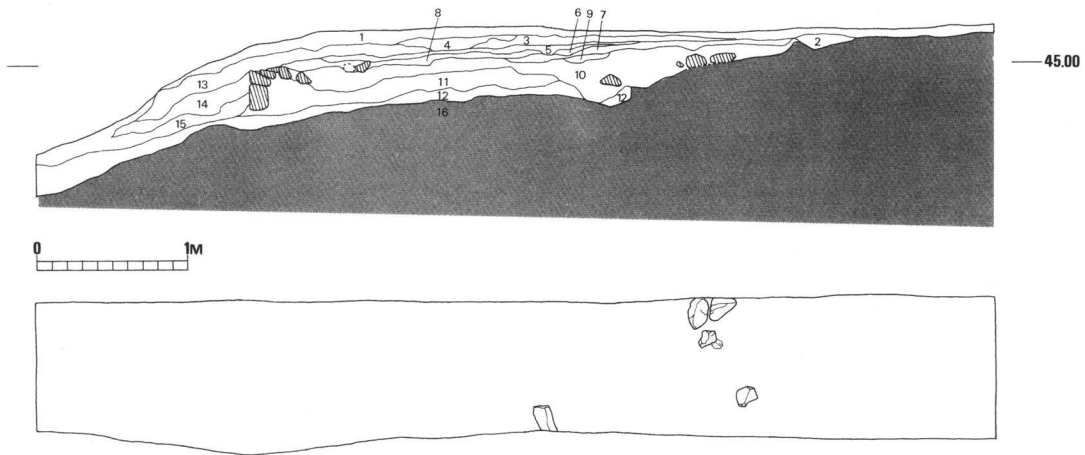
1. 腐植土
2. 暗黄褐色粘質土
3. 黄茶褐色粘質土
4. 花崗土
5. 暗黄褐色粘質土
6. 暗灰褐色粘質土
7. 暗黄灰褐色粘質土
8. 黄褐色粘質土(砂質混)
9. 黄褐色土(砂質混)
10. 暗灰褐色粘質土
11. 黄茶褐色粘質土(砂質混)
12. 灰茶褐色粘質土
13. 黄灰褐色粘質土
14. 暗茶褐色粘質土
15. 地山層(花崗土)



5. トレンチ 11

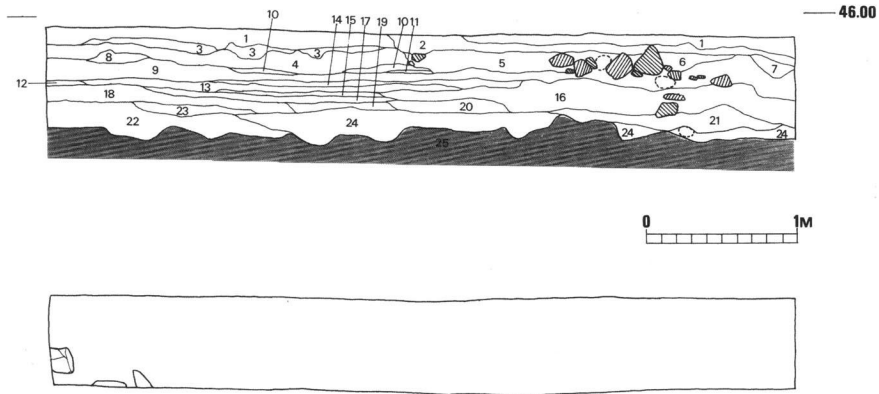
1. 黄茶褐色粘質土
2. 花崗土
3. 砂質土(粗い)
4. 花崗土
5. 暗灰褐色粘質土
6. 黄褐色粘質土
7. 暗黄褐色砂質土
8. 黄褐色砂質土
9. 腐植土
10. 灰褐色粘土
11. 暗黄褐色粘質土
12. 暗黄茶褐色粘質土
13. 暗黒褐色粘質土
14. 地山層(花崗土)

土層図・トレンチ実測図 (3)



6. トレンチ 7

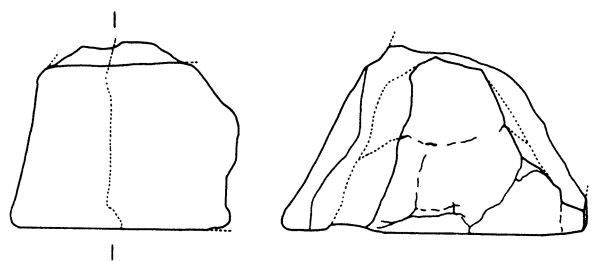
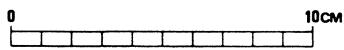
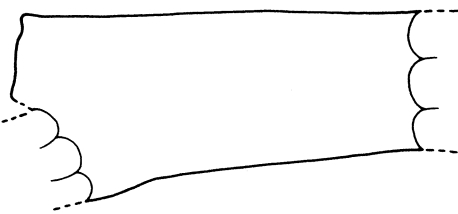
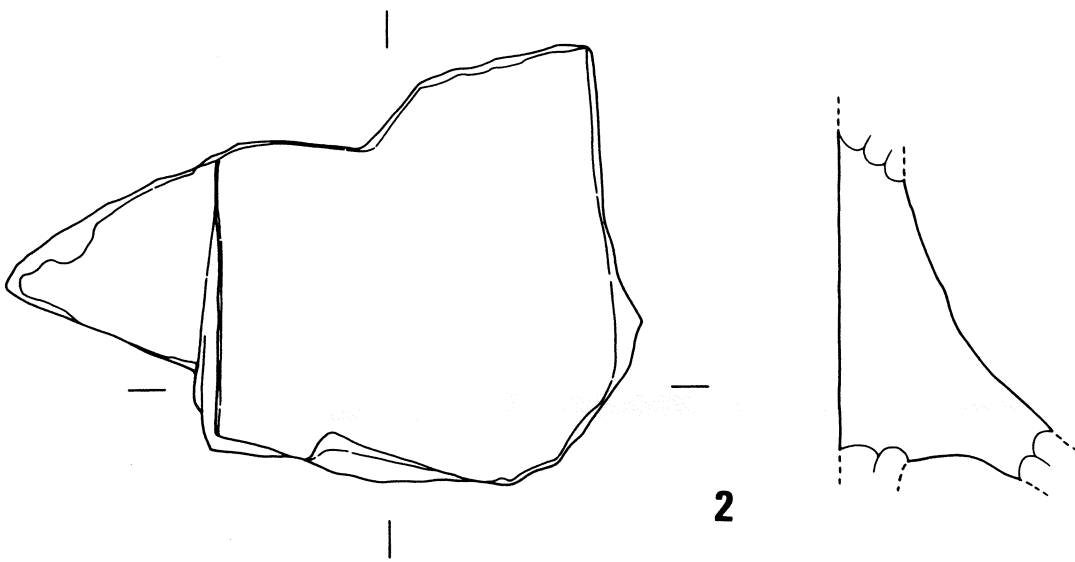
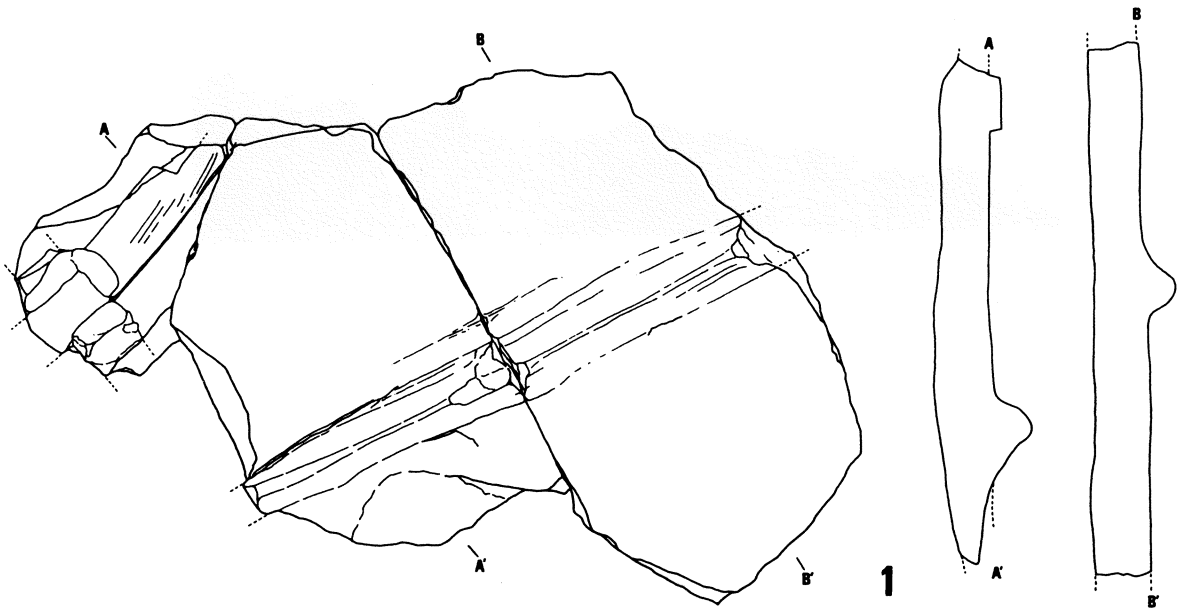
- | | | | |
|------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 表土層 | 5. 腐植土 | 9. 黄褐色粘質土 | 13. 明灰褐色粘質土 |
| 2. 暗灰褐色粘質土 | 6. 灰茶褐色粘質土 | 10. 暗茶褐色粘質土 | 14. 花崗土 |
| 3. 黄灰褐色粘質土 | 7. 黄灰褐色粘質土 | 11. 明黒灰色粘質土 | 15. 腐植土 |
| 4. 灰褐色粘質土 | 8. 灰茶褐色土 | 12. 黄灰褐色粘質土 | 16. 地山層(花崗土) |



7. トレンチ 9

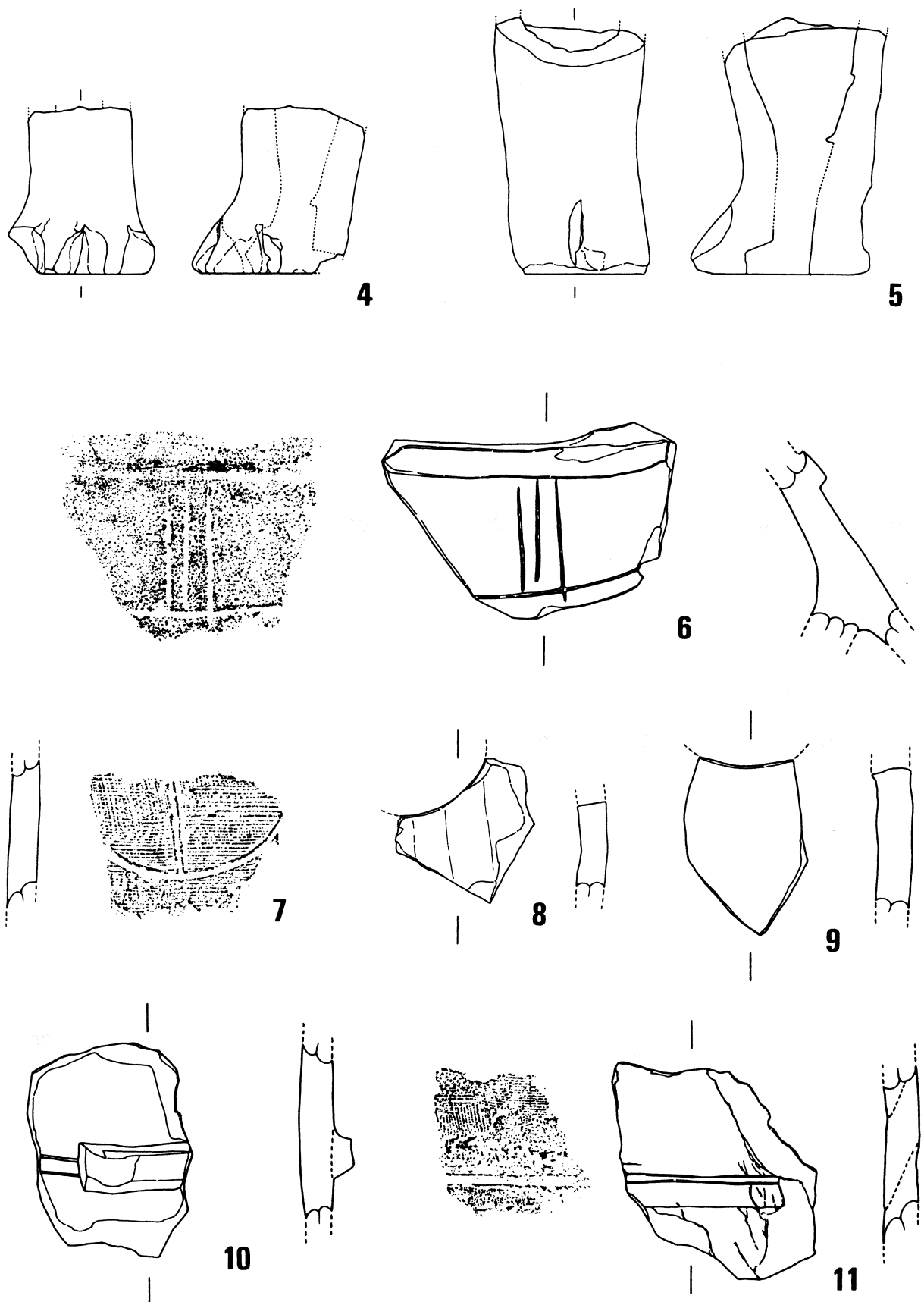
- | | | | | |
|-------------|------------|-------------|------------------|--------------|
| 1. 花崗土 | 6. 灰褐色粘質土 | 11. 灰褐色砂質土 | 16. 灰茶褐色粘質土(砂質混) | 21. 暗灰茶褐色砂質土 |
| 2. 腐植土 | 7. 灰褐色粘質土 | 12. 黄灰褐色粘土 | 17. 黄灰褐色粘土 | 22. 暗灰茶褐色粘質土 |
| 3. コンクリート残土 | 8. 暗黄褐色粘質土 | 13. 暗茶褐色粘質土 | 18. 黄褐色粘質土 | 23. 黄褐色粘質土 |
| 4. 暗黒灰褐色粘質土 | 9. 黄褐色粘質土 | 14. 灰褐色粘質土 | 19. 灰褐色粘質土 | 24. 灰茶褐色粘質土 |
| 5. 暗黄茶褐色粘質土 | 10. 灰褐色粘質土 | 15. 黄褐色粘質土 | 20. 灰茶褐色砂質土 | 25. 地山層(花崗土) |

出土遺物実測図 (1)



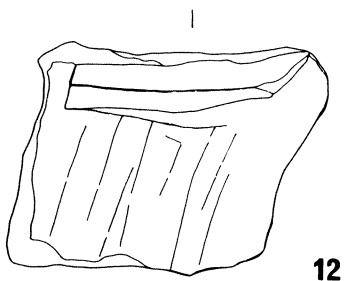
3

出土遺物実測図 (2)

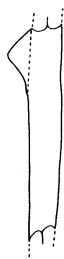


0 10CM

出土遺物実測図 (3)



12



13



14



15



16



17



18



19



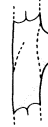
20



21



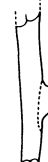
22



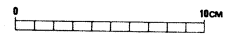
23



24



25



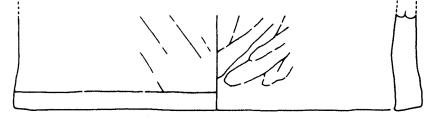
26



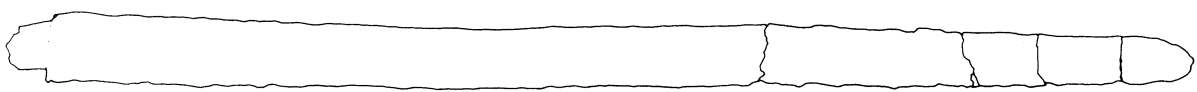
27



28



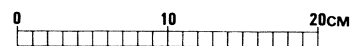
29

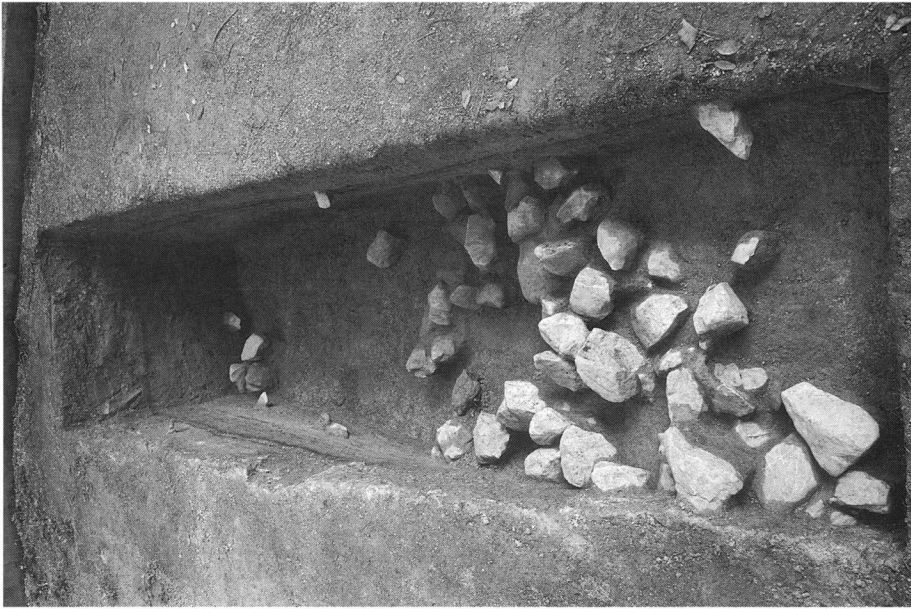


30

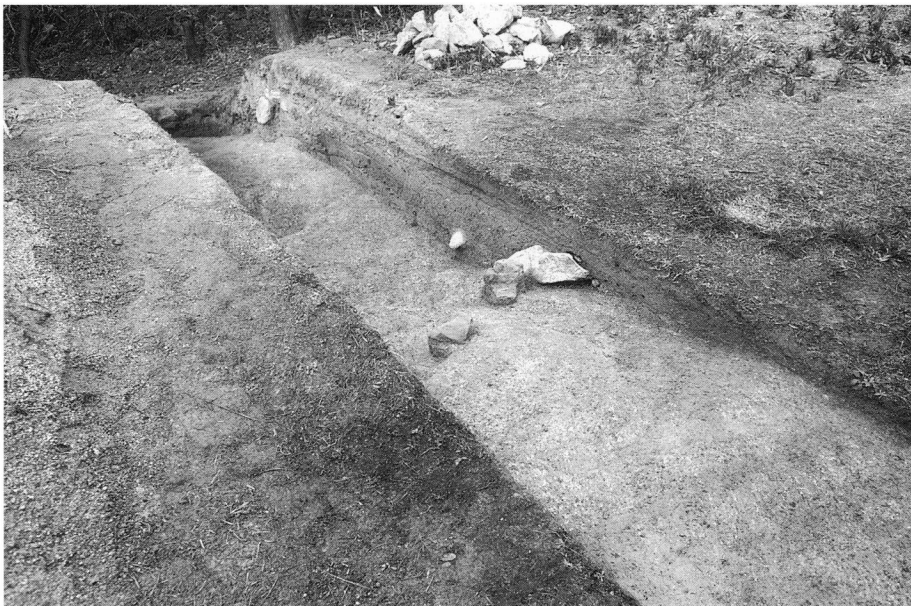


31





1. トレンチ3



2. トレンチ7



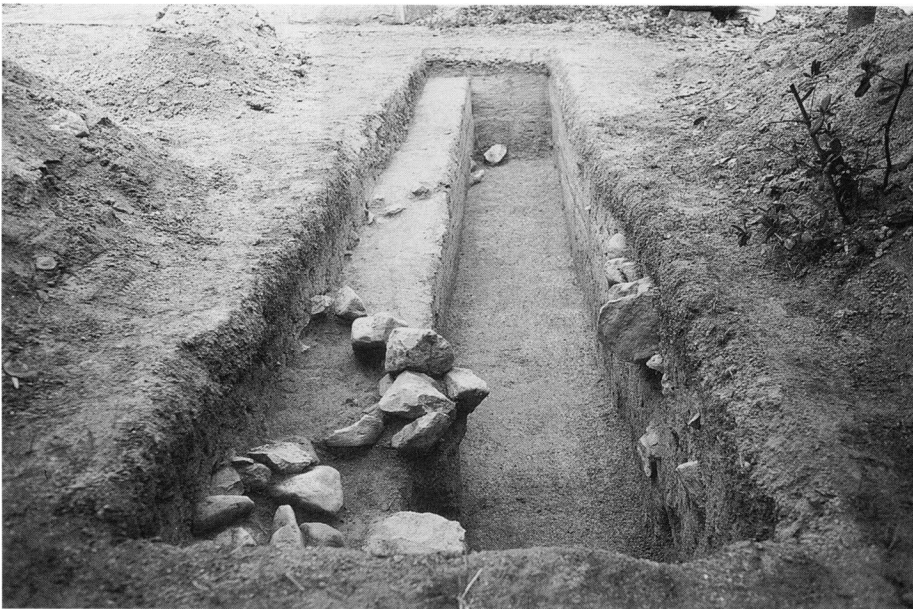
3. トレンチ8
(玉垣より内側)



4. トレンチ 8
(玉垣より外側)



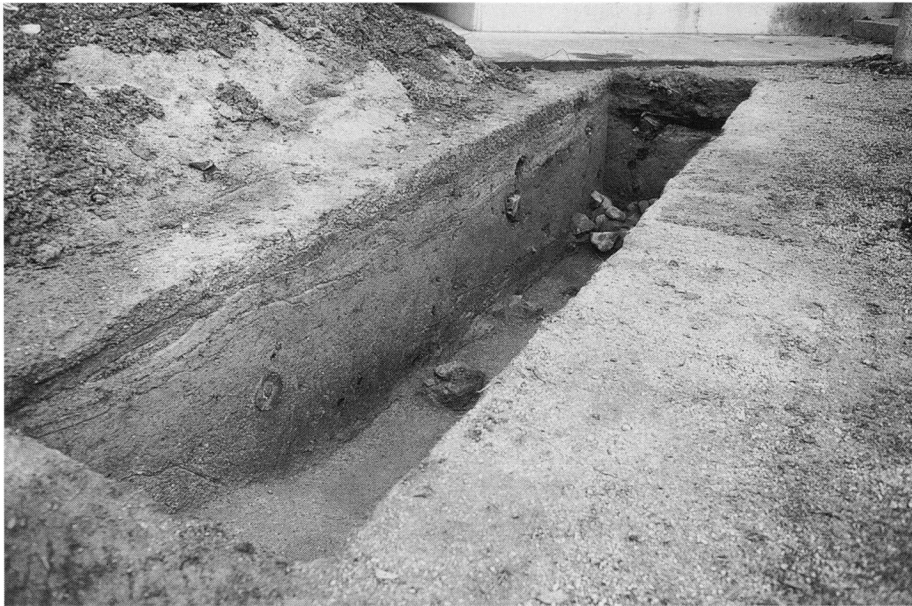
5. トレンチ 8
(玉垣より外側)



6. トレンチ 9



7. トレンチ 10



8. トレンチ 11



9. トレンチ 11



10. トレンチ 11



11. トレンチ 12



12. トレンチ 12



13. 石室東側壁の状況
(石室床面と側壁の状況)



14. 石室北壁と控積みの
状況

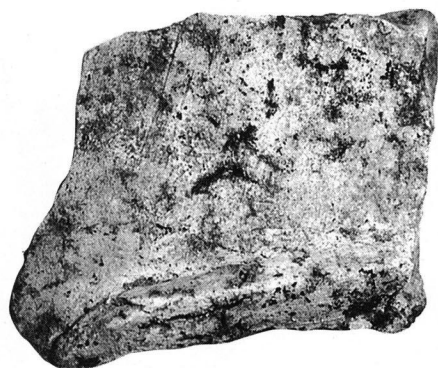


15. 石室 北・東側壁の
状況

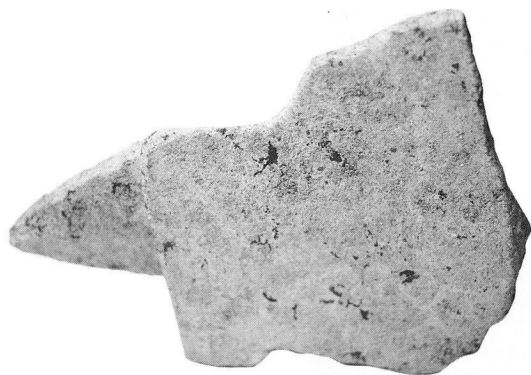
出土遺物①



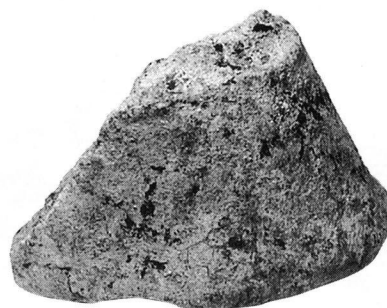
16. (実測図No.1)



17.



18. (実測図No.2)



19. (実測図No.3)



20. (実測図No.5)



21. (実測図No.4)

出土遺物②



22. (実測図No.6)



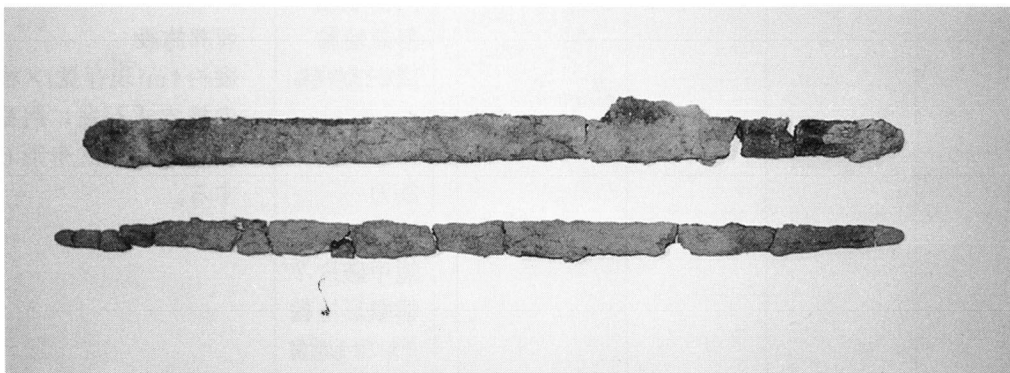
23. (実測図No.7)



24. (実測図No.10)



25. (実測図No.11)



26. (実測図No.30、31)

報告書抄録

ふりがな	かんおんじないせきはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書							
副書名	平成 11 年度国庫補助事業報告書 丸山古墳 II							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	久保田昇三							
編集機関	観音寺市教育委員会							
所在地	〒768-0060 香川県観音寺市観音寺町甲300番地1 TEL 0875-23-3943							
発行年月日	西暦 2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まるやまこふん 丸山古墳	かがわけん 香川県 かんおんじし 観音寺市 むろもとちよう 室本町 あざにしまるやま 字西丸山 691番	37205		34度 8分 43秒	133度 39分 5秒	19990917~ 20000327	37.2	観音寺市内 遺跡発掘調 査事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
丸山古墳	古墳	古墳	古墳 1基	鉄器 (鉄刀・鉄剣など) 円筒埴輪 形象埴輪 (馬など動物埴輪) (S22出土) 鉄刀 鉄鏃 短甲破片? 朝顔形埴輪 キヌガサ形埴輪 家形埴輪		・直径約35mの古墳時代中期 (5世紀中葉~後半)の円墳 ・埋葬施設 縦約4m(現存長)×横約3.5m の横穴式石室に阿蘇溶結凝 灰岩製刳拔式舟形石棺を有 する。		

観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書
平成11年度国庫補助事業報告書

丸山古墳Ⅱ

2000（平成12）年3月31日発行

編集・発行 観音寺市教育委員会

〒768-0060

香川県観音寺市観音寺町甲300番地1

電話（0875）23-3943

FAX（0875）23-3925

印刷 株式会社 三豊印刷